



TITLE:

<大會抄録>オスマン帝國の改革思想再考：「新オスマン人」を中心に

AUTHOR(S):

新井, 政美

CITATION:

新井, 政美. <大會抄録>オスマン帝國の改革思想再考：「新オスマン人」を中心に. 東洋史研究 2002, 61(3): 492-492

ISSUE DATE:

2002-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155433>

RIGHT:

イスラム化以降ハッジの儀禮にメッカでの儀式が加わった。

巡禮時の交易のあり方も變化し、ウカーズなどジャーヒリーヤ時代に榮えた市は徐々に衰退した。商賣のあり方も、ムハンマドは様々な規範を定めたが、コーラン、スンナの定める賣買規定がジャーヒリーヤ時代の慣習をまったく否定するものか斷定はできない。

イスラムはメッカに始まるが、しかし、ジャーヒリーヤ時代の社會秩序は、決してメッカ中心に動いてはいなかったのである。

オスマン帝國の改革思想再考

——「新オスマン人」を中心に——

新井政美

十九世紀にオスマン帝國の西洋化改革を先導し、方向づけたと言われるのが、「新オスマン人」と總稱される一群の知識人である。サードウク・リファト・パシャ（一八〇七—五六）が一八三七年にウイーンに公使として赴任したのち、改革派の同志ムスタファ・レシト・パシャ（一八〇〇—五八）に書き送った見解は、三十九年に公布されるギュルハーネ勅令の骨組みを、ほとんどすべて先取りしたものであったが、同時にその意見は、従来のオスマンの傳統の線上で理解可能なものでもあった。

その後登場した「新オスマン人」たちは、サードウク・リファト・パシャが紹介した西洋の近代文明をオスマン社會に導入すべ

く言論活動を行なった。しかし彼らの多くは、政府の壓迫を受けて一八六七年にヨーロッパへ逃れると、イスラムの文脈で政府批判をするようになる。そしてそうした批判の鍵になったのが「平等」概念であった。彼らは「國民」を希求する一方で、ムスリム・非ムスリム間の平等を「反イスラム的」と斷罪したのである。また彼らは、政府批判の切り札として「シャリーアの實施」をも持ち出した。一八七〇年代にイスタンブールへ歸還すると、彼らの論說からは「イスラム」を鍵とする政府批判は姿を消すが、しかし「シャリーアの實施」や「硬直したシャリーア」という言説自体は生き續け、その後の知識人たちの言論の中で、繰り返し登場することになるのである。

新羅骨品制再考

李成市

骨品制は、新羅の王京人を對象とした族制的身分制であり、聖骨・眞骨の骨階層と、六頭品・五頭品・四頭品などの頭品階層とで構成されていた。このうち聖骨は、夏德女王の死去により六四五年に消滅したと伝えられるが、後代になって夏德女王以前の歴代に對損されたという見解もある。頭品階層は六頭品から順次下降する構造からみて、元來、一頭品にいたる六階層からなっていたと推定される。

こうした骨階層と頭品階層の多階層からなる骨品制の成立につ